

月報400号発刊記念号

目 次

I	月報400号発刊記念号によせて	2
	回 想	所長 水 川 侑 2
	社研に関する雑感	麻 島 昭 一 3
	思い出すことごと	泉 武 夫 4
	社研月報400号記念に寄せて	宇 都 榮 子 5
	その後の月報にむけて	大 西 勝 明 6
	マージナル所員の藪睨み	木 幡 文 徳 7
	社会科学研究所と私	高 橋 祐 吉 8
	月報400号記念特集に寄せて	松 浦 利 明 9
	それぞれに「現在」を生きて400号	三 輪 芳 郎 10
	月報への期待	吉 澤 芳 樹 11
II	月報300号～400号の総目録と索引	12
	「専修大学社会科学研究所月報」目録	12
	専修大学『社会科学研究所年報』目録	20
	「専修大学社会科学研究所月報」および『社会科学研究所年報』の 執筆者索引（50音順）	24
	<編集後記>	26

I 月報 400 号発刊記念号によせて

回 想

水 川 侑

犬が人に咬み付くと直ぐ放し、再び襲い掛る。その間に逃げるなり、追い払うなりしないと再び咬み付かれる。社研に一度捕まえられると、しばらく檻に入れられたのち放される。これで解放されたと思っていると、再び捕えられる。私が、社研をお手伝いするようになったのは1974年4月に入職して間もない5月から6月からであった。その時、3、4枚の領収証を引継いで、日常的な金銭の支出を担当することになった。

今年10月に「月報」400号が発行された。74、75年当時の「月報」発行状況からすると、実に感慨深いものがある。当時の所員は74名で、現在の所員数と比べてかなり少なく、こじんまりしていた。しかも、所員の専攻分野はかなり限定的であった。このような要因もあってか、「月報」の原稿集めは大変苦勞を伴うものであった。

当時の財政資料から「月報」の発行状態を回顧すると、73、74年度末における月報印刷費と同原稿料の未支出金は、73年度末に、前者が20万円、後者が6万円、74年度末に、それぞれ、46万円、17万円——5号分に相当する——であった。年度末に「月報」5号分の未支出金があったということは、今日のように「月報」を毎月発行することができなく、およそ5ヶ月遅れて当該月の「月報」を発行していたということである。その要因は、原稿がなかなか集まらないこと、加えて、原稿を入れて出来上るまでに「それなりの」時間を要していたからである。当時の編集担当者は、原稿を集めるのが仕事であると同時に、遅れている分を少しでも回復させるようにと、自から原稿を御書きになられた（その代表は池田参与と森所員）。当時の編集担当者の御苦勞があったからこそ、「月報」の発行が中断・中止されることなく今日まで続いているのだと思う。

3～5ヶ月も遅れて「月報」が発行されるのが普通であった当時と比べて、毎月きちんと当月の「月報」が発行されている今日の状況は、誠に慶ばしいことである。これも偏に、歴代の、且つ現在の編集担当者の御苦勞と縁の下の力持ちとして雑務を担当して下さっている竹内さんのお蔭である。あらためて深い敬意と感謝の意を表します。2005年に、500号が発行される日を夢みつつ、社研の一層の発展を祈りたい。